

ある国への関心が敵国研究に変わる時
——20世紀初めに来日したロシア人留学生の記録——

法政大学国際文化学部

15G0509 杉江千紘

第1章 ある国に関心を持つ人のその後

1.1 政治に絡めとられた地域研究

本研究は、ある国に関心をもつ者は、母国とその国の関係変化に伴ってどのような人生を辿り得るのかに着目する。海外の言語や文化を学ぶ地域研究はもともと、外国の言語を学び、その国に住む人々の価値観、世界観を理解するための学問だった（片倉 1993）。地域研究と政治の繋がりを研究した政治学者の矢野 暢（1987）によると、第二次世界大戦後、特に冷戦勃発以降、特定の国に関心を持つ者が政治的な圧力を強く受けるようになった。

1.2 日本語を選んだロシア人

では、第二次世界大戦よりも前から 1904 年の日露戦争や 1939 年のノモンハン事件のような武力衝突が見られるロシア／ソ連と日本の場合、二国間関係の悪化はそれぞれの国に関心をもつ者にどのような影響を及ぼしたのだろうか。筆者は日露間で武力衝突が見られた 20 世紀初めに日本語を学んだロシア人が二国間関係悪化後にどのような人生を生きたのか調査をすることでこの問いに答える。日本人学生のその後については、すでに先行研究があるため¹、本研究では、20 世紀初めに日本に留学したロシア人留学生は帰国後の日露関係悪化後はどのように生きたのかを、ロシア語文献から辿る。

¹ 筆者は 2018 年度法政大学懸賞論文に応募して入選した。審査員からの講評で、「留学生の帰国後の活動と日露関係との関係性が明らかにできなかったこともあって、既存の研究の整理を超えた掘り下げないし展開としての面が十分ではない」「日露関係の考察にあたっては日本及びロシアにおけるメディアの報道など、（先行研究以外の、とくにロシア語による）独自の資料の収集、分析も有効であったのではないかと思われる」というコメントを頂いた。これらのコメントが、本研究の切り口に繋がっている。

第2章 日本を選んだロシア人学生と二国間関係の悪化

2.1 日本人とロシア人が共に学ぶ場

日本語を学ぶロシア人留学生在が当時最も多く在籍していたのが、東京の正教神学校である（Куланов 2014）。正教神学校は、1874年にロシア人宣教師ニコライ・カサートキンが建てた（長司祭ら 2008）。ニコライはロシア正教伝道を目的に1861年来日し、亡くなるまでの約50年間を日本で過ごした（ibid.）。ロシア正教に関心のある日本人のためにこの学校を開いたが、ロシア語を学びたい大勢の日本人が全国からおしかけ、最も多い時期で150人前後が集まった²（長縄 1989）。授業科目は20³を超え、当時の日本では非常に高い学問水準であった（長司祭ら 2008）。

2.2 正教神学校で学んだロシア人留学生の進路

創設者ニコライは正教神学校で学んだロシア人留学生在が卒業後日露友好の懸け橋になることを望んでいたが、卒業生の中にはスパイ活動に従事するなど軍に務めた者もいた（中村 2011b）。本研究でのスパイ活動とは、日本軍の人数や配置・武器の特性を聞き出すなどの情報収集の他、日本国内外で書かれた出版物を収集し、日本の経済・政治・軍事力を分析する敵国研究を指す。

アメリカやイギリスのソ連研究者による先行研究⁴は、ロシア／ソ連によるスパイ活動について、戦慄すべき狡猾な活動や（ハットン 1962）、悪名高く繰り返してはならない活動（カタミーゼ 2009）として強い口調で批判している。筆者は、日露友好期に日本に来日し、日本人とともに留学時代を過ごしたロシア人学生が本当に日本に対する戦慄すべき狡猾なスパイ活動をしたのか疑問に感じた。日本語の先行研究では、正教神学校で学び後にスパイ活動に従事したロシア人の学生について、ロシアに武道を紹介したことで有名なワシーリー・オシェプコフ（1892-1937、1906年来日）の記録が残されている。1905年の日露戦争終結以降一度は回復した二国間関係であったが、1917年のロシア革命、1918年から1920年までの日本軍によるシベリア出兵を経て再び関係が悪化した。革命によってボリシェビキ政権⁵によるソ連が誕生した際、日本政府がボリシェビキの対抗勢力の白衛派勢力⁶を支援したことも、反日意識の高まりを生んだ（原 2015）。こうした関係悪化に伴って、日本留

² 日本人学生の年齢は14歳から60歳までと幅広いが（渡辺 1999）、混乱を避けるために「学生」で統一する。ロシア人についても同様に表記する。

³ 日本外史、十八史略、四書などの和学・漢学、数学、ロシア語、新訳・旧約聖書学、教会史、奉神礼、教会法、聖師父学、牧会学、説教、倫理・比較などの各神学、哲学、地理・歴史、物理、心理学、聖歌、音楽など（長司祭ら 2008）。

⁴ 国立国会図書館で「スパイ研究」で検索してヒットする3件のほか、法政大学のOPACで「ロシア スパイ」「ソ連 スパイ」と検索してヒットする19件を確認した。

⁵ ボリシェビキはロシア語で多数派を意味する。専制体制の変換を求めるロシア社会民主労働党の中でも、レーニンを指導者とする多数派の人びとを指す。ボリシェビキは後に共産党と改称され、ソヴィエト体制を支配する（佐藤ら 2013）。

⁶ 「白軍」ともいう。革命勢力の「赤軍」に反対して帝政ロシア体制の維持を目指した（佐藤ら 2013）。

学経験を持つオシェプコフは、自身の語学力や知識を軍事目的で使うように促された（クラノフ 2017）。しかし、正教神学校に全部で何人の留学生が来日し、帰国後はどうなったのか詳細は不明のままだった。

正教神学校に詳しい歴史家のアレクサンドル・クラノフ氏へのインタビュー調査を行ったところ⁷、クラノフ氏は正教神学校で学んだ4人の学生の帰国後の詳細や正教神学校とロシア軍の結びつきについて情報を持っているが、出版社の事情で日本での出版が叶わなかったことが分かった。そこで本研究はこれらの情報をロシアで調査することで、「二国間関係の悪化はある国に関心をもつ者にどのような影響を及ぼしたのか」を明らかにする。それを通して、二国間関係が悪化した時、日本に留学した経験を持つロシア人は交戦の抑止力になったのか、ならなかったとしたらそれはなぜなのかを具体的に明らかにする。

2.3 調査方法

本研究では主に以下の2つの調査方法を用いた。これらの調査は、2018年9月から2019年6月までの10カ月間、筆者が国立モスクワ大学に留学したため、その機会を利用して行った。第1にモスクワで蔵書数最大の国立レーニン図書館と、同館付属の新聞保管センターで調査を行った。その結果、計16人のジャーナリストや研究者による20本の書籍・論文、新聞記事を確認した⁸。

第2に書面インタビューを行った。調査対象者はクラノフ氏と、彼の著作の2人の編集者である。前述のクラノフ氏の話から、出版の過程で掲載される情報が削られることもあると分かっていたので、ロシア語の文献にも載せなかった情報があるかもしれないと考えた。以上の3人への調査はロシア語で電子メールを用いて書面で行った⁹。ロシア語での聞き間違いや言い間違いによる誤解を避けるために、書面が適切な方法だと考えたためである。上記の3人とのやり取りでは、理解が曖昧な部分は双方が納得できるまで質問を繰り返した。

⁷ クラノフ氏への書面インタビュー調査を行った。詳しくは後述する。

⁸ レーニン図書館にて「Первые русские в Японии」（初めて日本に来たロシア人）などいくつかのキーワードで検索した。さらにクラノフ氏に主要な文献を教えてもらった。これらの文献の参考文献一覧を辿り、極力広範に文献を集めた。

⁹ インタビュー内容を論文に使用する許可を得た。

第3章 帰国後のロシア人留学生個人の記録

3.1 正教神学校に來日したロシア人

ロシアでは、東京の正教神学校に何人のロシア人がやってきたのかデータが記録されていた。1902年以降、29人のロシア人留学生がニコライのもとで学んだ（表1）。

表1) 東京の正教神学校で学んだロシア人留学生

時期区分	在学年	人数	派遣の背景
第1期	1902-1905	2人	・日本語通訳育成のため
第2期	1906-1913	18人	・日露戦争での祖国敗戦によりロシアで日本研究の重要性が理解されたため
第3期	1914-1919	3人	
不明		6人	・日本語学習、日本語通訳育成のため ・高度な教育を受けるため

出典) Куланов (2014、2017) をもとに筆者作成

東京の正教神学校は日本人にロシア正教を教えるために建てられたが、日本語を学びたいロシア人も受け入れていた。表1から分かるように、ロシア人留学生の来日目的は様々であり、スパイになることを見越していない者も含まれる。日露戦争が終わり日露協商期¹⁰と呼ばれる1906年には、より多くのロシア人学生が正教神学校に送られた。日本人と共に正教神学校で約5年間学び、帰国後は多くの学生が革命後のソ連軍に依頼されて軍で勤めた (ibid.)。一例をあげると、ウラジーミル・プレシャコフ (1892-1937、1906年来日) は日本語通訳になるために来日し熱心に聖書や歴史の勉強をしたが、帰国後は通訳のかたわら、日本人を欺いて情報を得るスパイ活動を担った (ibid.)。

3.2 日露の懸け橋になるはずだった人材

日本留学経験をもつロシア人は、語学や文化理解の面で日本人とのコミュニケーションをとることができ、ニコライが望んだように日露友好に貢献することもできる人材だった。例えば、正教神学校の質の高い教育を受けるために来日したワシーリー・オシェプコフ (1892-1937、1906年来日) は、柔道をはじめ日本の武道に親しんだほか、日本語を自由に操り日本での生活経験があるために日本人と簡単に打ち解けることができた (Лукашев 2003)。同じ時期に来日し、後にスパイとなったイシドール・ネズナイコ (1893-1968、1906年来日) がスパイ活動に従事していた時も、スパイだと気付かない日本人から人柄・日本語能力共に絶賛されていた (Куланов 2014)。

そうであるにもかかわらず、日露関係が悪化したため、語学学習経験は軍によって利用され、スパイ活動に適した人物とみなされた。オシェプコフやネズナイコのコミュニケーション能力は、日本軍の人数や配置、武器の特性を聞き出す敵国研究というスパイ活動の

¹⁰ ポーツマス条約締結後、日露両国は戦争に関わる諸問題を正常化し、政治、経済、軍事分野での相互協力を生んだ (ペストゥシコラ 2015)。露日協商は、ロシアの弱体化と帝国崩壊に至る1917年頃まで続いた (ibid.)。

ために使われた。

3.3 日露友好の懸け橋として伝えられてきた正教神学校

上述の Куланов (2014) や Лукашев (2003) の研究から分かる内容は、のべ 29 人の正教神学校へのロシア人留学生の内 4 人分の情報であり、残りのロシア人留学生の帰国後の詳細は分かっていない。残りの 25 人が何をしていたのか考えるきっかけになるのが、Куланов (2014) や Лукашев (2003) 以外の 14 人の研究者やジャーナリストによって書かれた 17 本の文献である。

正教神学校で学んだロシア人留学生にロシア国内で初めて着目したのは、新聞記者であった。1908 年にはジャーナリストがこの学校に取材で訪れ、新聞『Россия』(ロシア)に記事を書いたほか、1912 年の新聞『Московские ведомости』(モスクワ新報)の記事も、正教神学校に言及している。これらの新聞記事は正教神学校で学ぶロシア人留学生の年齢や人数、学校の経済的な運営状況を報じた。ロシアで日本語学習が盛んになり始めた時期である。その後正教神学校は長らく注目されてこなかったが、1970 年代頃からソ連の歴史研究家が日本で学んだロシア人留学生に興味を持つようになった。中でも公文書保管所が開放された 1990 年代には東洋学者¹¹のアレクサンドル・ホフロフによって公文書を用いた大規模な研究が初めて行われ、正教神学校が優秀な日本研究者や日本語通訳者を輩出したことが知られるようになった。

モスクワの国立レーニン図書館と同館附属の新聞保管センターで前述の 14 人の研究者やジャーナリストによる新聞記事を確認した結果、正教神学校のロシア人卒業生がスパイ活動を強要されていたことに関する記述はなかった。この 14 人の内、8 人の研究者によって書かれた書籍・論文と、1 人のジャーナリストによる新聞記事はこの学校を「両国民の相互理解と友好のために努力した場」(Иванова 1993, C.92) や「卒業生の多くは日本文化の優れた活動家となった」(Скоробогатько 2016, C.122-124) と記録し、正教神学校の卒業生が文学や武道を通じて日露交流に貢献したことに目を向けていた¹²。Хохлов (1996) も、通訳・研究者養成が成功し、二国間関係を深めるきっかけになった学校として記している。卒業生の数人が後に相手国の文学作品を翻訳したことも一因である。これらの記述から、詳細な消息がわからない 25 人は日露交流に従事した可能性が高い。

3.4 決して断れないスパイ活動の依頼

前節で述べたように正教神学校で学んだ 29 人の中には帰国後スパイにはならなかった者

¹¹ ロシアで東洋学 (Востоковедение) 研究が発展したのは 19 世紀のことである。ヨーロッパと同じく植民地主義に基づき、領土併合という実務的な問題を解決する必要が生まれたためだ。チュルク語、アラブ語、イラン語の他、エジプト学やインド学が盛んになった。中国研究も行われた。日本研究の重要性を軽視したことは日露戦争敗因の 1 つであった (電子版百科辞典 Большая Российская энциклопедия-электронная версия “Востоковедение” 電子版ロシア百科辞典 https://bigenc.ru/world_history/text/1930022, 閲覧: 2019 年 8 月 20 日)。

¹² 14 人中残りの 5 人は、学費や学校のカリキュラム、ロシア軍により送られた学生の人数、学校の外観や内観、日本人卒業生などについて触れている。

がいたと推察できるが、スパイだったことが明らかな 4 人も、スパイになることを望んではいなかった。4 人のロシア人がスパイ活動に取り組んだ背景には、軍で働く給料が高いことや、引き受けなければ逆スパイと疑われてしまうことが影響したと考えられる。実際にソ連軍への忠誠を示さなかった留学生は軍に射殺されたり、職を失ったりした。

日本研究の必要性が理解されるようになった日露戦争後、オシェプコフと同時期に来日したロシア人の 1 人が、トロフィーム・ユルケーヴィチ（生年不明・1938、1906 年来日）である。ユルケーヴィチの父は息子に質の良い教育を受けさせたいと考え、ニコライのもとに送った（Куланов 2014）。しかし彼は帰国後の 1933 年にモスクワの学校で親日思想を持つ生徒を育て、授業に使用した教材も親日的な内容だったため、教師としての仕事に不向きであるとして解雇された（ibid.）。

スパイ活動を強要される中でもスパイ活動を望まない者がいたことは、前述の留学生の来日目的からも分かる。高い水準の教育を受けるために来日した前述のオシェプコフは、ソ連軍に依頼されて戦時通訳を務めたが、軍での仕事が気にいらず、日本語を教える仕事や日本に靴を売る仕事、映画を上映する仕事で生計をたてようとした（ibid.）。このことは、日本の言語や文化を学ぶつもりだった者が二国間関係の悪化によりスパイ活動を依頼されたことに対する抵抗と捉えることができる。しかし商売の経験もないオシェプコフの新規事業は上手くいかず、日本軍について情報を集める敵国研究から逃れることはできなかった。

3.5 ロシア人留学生の最期

スパイになった者でさえ、もともとスパイになる気はなかった。スパイだった者もスパイではなかった者もいたと考えられるが、Куланов（2014）は、正教神学校で学んだロシア人は、1937 年のスターリンによる日本研究者粛清で射殺されたと推測している。日本研究者を筆頭に、当時日本に関わりを持ったロシア人のほとんどが逆スパイの疑いをかけられて粛清の犠牲になったためである。上手く逃げ延びて親族と共に余生を幸せに過ごしたことが明らかになっている前述のネズナイコを除いて、残りの 28 人は射殺されたのではないかと推測されていた。

3.6 『昇る太陽の陰で』出版に込められた著者と編集者の想い

正教神学校に触れたロシア語の文献を見てみると、9 人によって書かれた 11 本の文献は学校が果たした日露交流史上の役割に着目していた。そのような中で、クラノフ氏は正教神学校で学んだロシア人留学生が帰国後、日本人を欺くスパイでもあったことを明らかにした。この本¹³はロシアでのみ刊行されたが、著者のクラノフ氏はもともと日本とロシアの両方で出版したいと考えていた¹⁴。しかし無名のスパイに関する本は売り上げが上がりやすく、日本人にとっては面白くないのではないかとある日本の出版社の意見により、出版に至らなかった¹⁵。クラノフ氏は、誰に向けたどのようなメッセージを込めてこの書籍を

¹³ 『В тени восходящего солнца』（『昇る太陽の陰で』（2014）を指す。

¹⁴ クラノフ氏への書面インタビューより。

¹⁵ クラノフ氏への書面インタビューより。

出版しようとしたのだろうか。

クラノフ氏や彼の本の編集を担当してきた B 氏の話によると、日本に留学したロシア人の物語がスパイシリーズとしてロシアで出版されたのは、偶然が重なった結果であったことが分かった。クラノフ氏は日本研究者について調べていたところ偶然彼らがスパイであったことがわかり、興味深い人生を歩んだ 1 人 1 人がどのような人間だったのか、自身の運命をどのように受け止めていたのかを知りたいという強い気持ちが本の執筆に繋がった。ちょうど出版社がスパイシリーズのための原稿を探していたためにそのシリーズの 1 冊として出版された¹⁶。日本に留学したロシア人が帰国後日本人を欺くスパイ活動をしたことに対して、元ロシア人留学生を糾弾する意図はなかった。クラノフ氏はスパイ活動を行ったロシア人留学生が必ずしも日本人を憎んでいたわけではないことを伝えたいと考えていた。B 氏と同じくクラノフ氏の本の編集を担当してきた Z 氏も、不当に扱われて忘れられてしまった元留学生のことを明らかにしたという想いで刊行に踏み切ったのである¹⁷。今まで日露の懸け橋として書かれてきた東京の正教神学校で、実は将来のスパイが養成されていたことを明らかにする試みの背景には、日本に留学したロシア人はスパイになる気はなかったことを知ってほしいという想いもこめられている。

¹⁶ 出版社で働く B 氏への書面インタビューより。

¹⁷ 出版社で働く Z 氏への書面インタビューより。

第4章 政治に絡めとられた日本に関心を持つロシア人

4.1 結論：特定の国への関心が敵国研究に変わること

本研究では20世紀初めに日本に留学したロシア人留学生の帰国後の活動を辿り、彼らがロシアでどのように議論されてきたのかを調査することで「二国間関係の悪化はある国に関心をもつ者にどのような影響を及ぼしたのか」という問いに取り組んだ。帰国後の詳細が記録されているのは、全部で29人いた留学生の内4人分であった。質の高い教育や日本語の通訳になるために来日し、スパイになるつもりはなかった。二国間関係の悪化に伴ってソ連軍から日本の政治・軍事・経済状況を分析するなど敵国研究を強要された時、ソ連の学校で当時の政府の方針とは異なる親日思想を教えるなどの抵抗も見られた。しかし、断れば逆スパイと疑われる状況下で、スパイ活動に取り組まざるを得なくなっていった。

残りの25人が日本留学から帰国後に何をしたのかを考える手掛かりになるのが、ロシアで蓄積されてきた書籍・論文・雑誌記事の内容である。ジャーナリストや研究者など9人によって書かれた11本の文献では、ロシア人留学生は文化交流面で貢献した人物と書かれていたり、正教神学校を日露の交流の礎になった場として捉えたりしていた。このことから、帰国後の詳細がわからない25人の元留学生は、スパイにはならず日露交流面で活躍をした可能性が高い。にもかかわらず、1937年に始まった日本研究者粛清で29人中28人は射殺されたのではないかと記されていた。ロシア／ソ連のスパイに関する先行研究は主に、特殊な訓練を受け、戦慄すべき狡猾な活動（ハットン1962）をした人物としてスパイを描いてきたが、本研究で扱ったのは特殊な訓練を受けず、スパイになる気はなく日本語を学んだ元留学生であった。

4.2 本研究の限界と意義

本研究はニコライが建てた東京の正教神学校をめぐるロシア語文献を可能な限り網羅した。しかし筆者が確認した限り、正教神学校に関わる文献はもう3本存在する。2本は本研究でレビューした先行研究で言及されていた文献だが、レーニン図書館で原著が見つからなかった。もう1本は、先行研究では関連性が書かれていたものの、その文献から関係する記述が見つからなかった。これについては巻末資料で詳述する。

本研究では日露関係が比較的良好だった時期に正教神学校で学んだロシア人留学生が帰国後はどのように生きたのかを辿り、両国間の関係悪化に伴い、留学で培った語学力や知識がどのように政治利用されていったのかを具体的に振り返った。今日、グローバル化の進展で留学に行く人が増える中で、ある国への関心はどのような条件の下で、どのような形で政治に絡めとられうるのかを示したことに意義があったと言える。

参考文献一覧

〈日本語文献〉

- 片倉もとこ (1993) 「第 10 章 普遍言語としてのエトス」『講座現代の地域研究 第 3 巻』矢野暢編、弘文堂、247-271 頁。
- カタミーゼ、スラヴァ (2009) 『ソ連のスパイたち—KGB と情報機関 1917-1991—』伊藤綾訳、原書房。
- クラノフ、アレクサンドル (2017) 『東京を愛したスパイたち 1907-1985』村野克明訳、藤原書店。
- 佐藤次高、木村靖二、岸本美緒 (2013) 『詳述世界史 改訂版』山川出版社。
- 長司祭パウエル、及川信 (2008) 『日本正教会の歴史 1 日本の光照者使徒ニコライの歩み』日本ハリスト正教会教団。
- 長縄光男 (1989) 『ニコライ堂の人びと』現代企画室。
- 中村健之介 (2011 b) 『ニコライの日記 (下)』岩波文庫、436-438 頁。
- ハットン、ジェービー (1962) 『スパイ』川島広守訳、日刊労働通信社。
- 原暉之 (2015) 「大戦と革命と干渉」『日露関係史』東京大学出版会、176 頁。
- パヴロフ、デーバー、エスアー・ペトロフ (1994) 『日露戦争の秘密—ロシア側史料で明るみに出た諜報戦の内幕—』左近毅訳、成文社。
- ペストゥシコ、Iu.S.、Ia.A. シュラートフ (2015) 『『例外的に友好的』露日関係』『日露関係史』加納格訳、東京大学出版会、153-167 頁。
- 矢野暢 (1987) 「序章 地域研究と政治学」内山秀夫ほか編『講座政治学 4』三嶺書房。
- 渡辺雅司 (1999) 「ロシア語の黎明期」『東京外国語大学史』東京外国語大学。
<http://www.tufs.ac.jp/common/archives/TUFShistory-russian-all.pdf>、(閲覧：2018年10月1日)

〈ロシア語文献〉

- Бесстремьянная Г.Е. Христианство и библия в Японии: церковных связей Московского патриархата.М.,2006. С140_160.
- Иванова Г.Д. Токийская школа иностранных языков(1873-1885) русское отделение //<Русские в Японии XIX—начала XX в.несколько портретов>.М.,1993. С122_124.
- Иванова Г.Д. Жизнь и деятельность святителя Николая Японского.М.,1996а.
- Иванова Г.Д. Переводчики Русской литературы воспитанники православной духовной семинарии в Токио.М.,1996b.С59_62.
- Зенита Л.В. Японские ученые о Российской духовной миссии в Японии//Православие на дальнем востоке.Вып.2.СПб.,1996.С21_29.
- Кузнецов С.И. Первые русские ученики в Японии //Восток—Запад в контексте мировой истории. Материалы Всероссийской научной конференции. Иркутск., 2011. <http://www.orientalinstitute.ru/japanology/pages/528-first-students.html> (閲覧：2019年8月30日) .
- Куланов А.Е. В тени Восходящего солнца.М.,2014.
https://www.ereading.by/bookreader.php/1033337/Kulanov_V_teni_voshodyaschego

[solnca.html](#) (閲覧 : 2019年8月30日)

Куланов А.Е. Ощепков.М.,2017. С58_59.

Логачева.Л.Н. Путевыеизаметки святителя Николая, архиепископа японского , о Японии во время образа православных церквей//Православие на Дальнем Востоке. Вып.4.СПб.,2004.С92_99.

Лукашев М.Н. Сотворение Самбо: родится в царской тюрьме и умереть в сталинской.М.,2003.

Павлович Н.А Святой Равноапостольный архиепископ Японский Николай.М.,2017.С60_77.

Позднеев Д.М. Святитель Николай Японский в воспоминаниях современников.М.,2013.С48_91.

Саблина Э.Б 150 лет православия в Японии: История Японской Православной церкви и ее основатель святитель Николай.СПб.,2006.

Скоробогатько Н.В. Токийская семинария//Для японцев он стал японцев Апостольский путь святителя Николая(Касаткина).М.,2016.С122_128.

Хохлов А.Н. Роль Токийской православной семинарии в подготовке переводчиков-японистов // Православие на Дальнем Востоке. Вып. 2. СПб., 1996.

Чех А.А. Николай до святитель Николай Японский краткое жизнеописание из дневников.СПб.,2001.С21_30.

〈ロシア語新聞記事〉

По Японии//Новый край.1902.6.март.С.2. № 2.

Горячковская М.Русские мальчики в японской школе//Россия.1908.20 нояб..№ 920.

Японская миссия//Московские ведомости.1912.25.февр.. № 46.

巻末資料

先行研究では言及されていたが、筆者未確認の文献文献（筆者作成）

筆者	筆者情報	学校や卒業生についての記述
Спальвиный (1928)	日本研究者 東洋学者	未確認（レーニン図書館で原著が見つからなかった）
Алексеев (1998)	スパイ専門の 歴史研究者	記述なし（先行研究では関連性が書かれていたものの、関係する記述が見つからなかった）
Кузнецов (2006)	歴史家	未確認（レーニン図書館で原著が見つからなかった）